平成27年度 進路だより

Frontier Spirit!

J Hirata

第１０号
H27.12.25
文責：﨑田

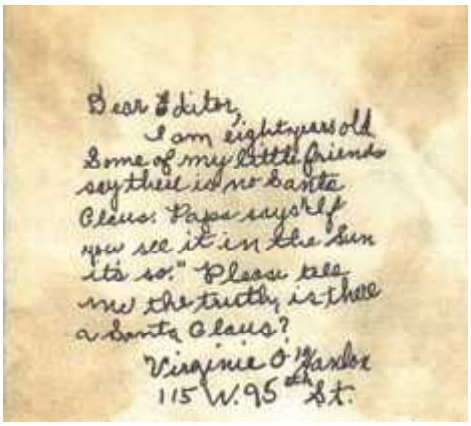
1月の行事（進路関係等）

1（金）	● 元日
4（月）	仕事始め
6（水）	プレ演習③［～7(木)］
7（木）	始業式　納め式　服装指導　大掃除
8（金）	小論文ガイダンス①
9（土）	土曜課外①② 土曜講座① 登校学習会②
11（月）	● 成人の日
15（金）	大学入試センター試験激励会③
	職業人講話①
16（土）	大学入試センター試験［～17(日)］
	進研模試①②［②は～17(日)］
18（月）	大学入試センター試験自己採点③
	センター本番演習②
	午前中授業③［～29(金)］
	三者懇談期間①②③
19（火）	午前中授業①②［～21(金)］
23（土）	土曜課外①② 土曜講座① 登校学習会②
26（火）	歌声コンクール①②
29（金）	第3学年生徒通常最終登校日
	小論文ガイダンス②
	スキー教室①
30（土）	駿台模試①②

※○数字は学年を示します

<Yes, Virginia, there is a Santa Claus. …>

今年３月に卒業した第 50 期生がまだ１年生であった、３年前のクリスマスの日。学年通信に記し、学年集会でも話題にした話があります。私の好きな、この話を今回、ここに再掲したいと思います。


Dear Editor,
I am eight years old
Some of my little friends
say there is no Santa
Claus. Papa says "if
you see it in the Sun
it's so." Please tell
me the truth, is there
a Santa Claus?
Virginia O'Hanlon
115 W. 95th St.

ヴァージニアがサン新聞に送った手紙

～今から約 120 年前、ニューヨークの新聞社ニューヨーク・サンにヴァージニアという８歳の少女から１通の手紙が届きました。

こんにちは。私は８歳です。
サンタクロースなんかいないって
友だちが言います。
サン新聞に書いてあることなら本当だとパパがいつも言っています。
本当のことを教えてください。サンタクロースはいるのですか。

ニューヨーク・サンはこの少女からの手紙に社説で答えました。その心温まる内容は 120 年近く経った今でも語り継がれています。かなり長文なので私なりに意訳して、以下にその概略を紹介します。

ヴァージニア、それは友だちが間違っているよ。きっと、その友だちは自分で見たことがないものは信じられず、見えるものだけを本当だと思ってるんだね。

でもねヴァージニア、大人でも子どもでも、本当にわかることはほんの少しなんだ。この広い宇宙には、人間の知らないことが、いっぱいあるんだよ。

実はね、ヴァージニア、サンタクロースはいるんだ。たとえ目には見えなくても「心」があるのと同じだよ。サンタクロースを信じられないのは、心を信じられないのと同じだよ。何を見たって面白くなくなるだろうし、この世界から笑顔も消えてなくなってしまう。

パパに頼んで、クリスマスイブの日に全部の煙突に見張りを置いてごらん。でもサンタクロースが見つからなくても「サンタクロースがいない」って証拠になるかい。誰も見たことがない…ってことがすごいんだ。誰も見たことがないってことは、「いない」って証拠にはならないよ。

サンタクロースはいるよ、ヴァージニア。これから何千年経とうが、十万年経とうが、サンタクロースはずっと皆の心をワクワクさせてくれるよ。

「Yes, Virginia, there is a Santa Claus.」で始まる一文が印象的な、この社説をニューヨーク・サンは廃刊されるまでクリスマスのたびに掲載し続けたそうです。

少女ヴァージニアはその後、当時の女性としては珍しく大学に進学し、小学校の教師として教壇に立ち続けました。彼女が校長を務めていたときには 670 人の全校生徒にサンタクロースからのプレゼントが届いたそうです。彼女が亡くなった際、ニューヨーク・タイムスは「サンタクロースの友だちが亡くなった」と報じました。

ヴァージニアにとって最も尊いのは、“夢”を信じたいと願う純粋な気持ちを持っていたこと、そして彼女にとって幸せだったのは、その“夢”を優しく後押ししてくれる大人と出会えたこと…だったのではないでしょうか。クリスマスの時期、ちょっとこんな話を思い出しました。～（以上、第 50 期学年通信「*TEAM MINAMI 50*　菁莪育才　第 10 号」所収）

さて、皆さんがこの年の瀬に、ここに紹介した文を目にして何かを感じてくれれば嬉しく思います。

2015 年も残すところわずか…。３年生はいよいよ受験本番、２年生は「３年０学期」、１年生は「もう中学生とは言わせない」という時期になります。私たちは、あなた方が大切にしたいと思うことがあるのなら、いつでも背中を押す準備がありますよ。…全校生徒の皆さん、新年を迎えて再び顔を合わせたとき、私たちが笑顔で「Yes, ○○, there is ○○.」と言ってあげられる「思い」を持ってください。

＜南高生に読んでもらいたい一冊＞

今回紹介するのは、**堤未果著『ルポ貧困大国アメリカ』(岩波新書、2008)**です。発刊から 10 ヶ月後には 30 万部超の売り上げを見せた話題作で、日本エッセイストクラブ賞、新書大賞 2009 を受賞した一冊です。

貧困層の生活に目を向けて、アメリカの現状を訴えたそのペンは、その後も岩波新書から『ルポ貧困大国アメリカⅡ』(同、2011)、『(株)貧困大国アメリカ』(同、2013)という本になって発行されています。紹介した本は７年前のものですので、継続的に読んでみるのも良いでしょう。

もちろん、この一冊でアメリカの現状を「全てを知る」ことなど到底できませんし、読む側としては更に現在までの状況や背景を多角的に学ぶ必要はあると思います。しかし、**「日本の合わせ鏡」とも言われるアメリカの現実の一つを見つめる機会は、改めて“日本”の行く末を問い、我々が学ぶ意義も考える機会にもなる**ように思います。

戦後 70 年が過ぎたことは既に何度か触れました。戦後の混乱期を経て、**未曾有の繁栄期の中で生まれ育った我々とその子どもたちが社会の中枢を担うようになった今**、我々はまた何か大切なものを忘れてしまいそうな中で生きているようにも感じます。私もその一人なのかも知れません。『ルポ貧困大国アメリカ』を読み進めると、**「戦争の民営化」「経済的徴兵制」などという物騒かつ不思議な言葉が登場**しますが、**ここに書かれていることが「日本の合わせ鏡」とならないことを願う**ばかりです。

この一冊を紹介するのは、「先細りの社会を悲観して気持ちを暗くする」ためではありません。「昨日と同じように明日があるのが当たり前」といった安穏とした愚民に零落れていくことなく、一人一人が「自分」を、「社会」を変えていく視点と能力を身につけ、「家族」や「地域」「社会」そして、この国が将来への夢に溢れた存在で在り続けるための啓蒙の書だと感じてくれれば幸いです。

＜ゲゲゲの鬼太郎に学ぶ…＞

「ゲゲゲの鬼太郎」の作者として知られる漫画家の水木しげる氏が 12 月初旬に 93 歳で逝かれました。

「ゲゲゲの鬼太郎」を初めてテレビで観たころ、幼心に少々気味悪かったのを覚えています。しかし、何度となくテレビ画面で目にするうちに、妖怪とはいえ、そのユーモラスなキャラクターに興味が湧いて、何となく習慣的に観るようになりました。

水木氏と妖怪との関わりは、「のんのんばあ」と呼ばれる信心深いお手伝いさんとの交流に端を発します。**神社を見て、幼かった水木氏が「建物の中には誰もいないのに、何に向かって拝むんだ」と問うと、のんのんばあから目に見えないものの大切さを説かれ、「普段は信じていない者が、都合良いときばかり拝むと“おとろし”に襲われる」んだと諭された思い出**は、微笑ましくもどこか合点がいく話です。

また、**戦争中に激戦地パプアニューギニアに出征して部隊が玉砕した際、真っ暗闇のジャングルを一人で逃げ惑った末、柔らかい何かにぶつかって前に進むことを諦めて、その場に寝たところ、朝になって見ると目の前が断崖絶壁だったという体験**も不思議なエピソードです。前夜に水木氏がぶつかったのは、「ぬりかべ」(？)だったのでしょうか。

私の息子は今、アニメ「妖怪ウォッチ」に夢中です。私は普段、「くだらない」と言ってあまり相手にしませんが、いつの世にも、人間の生活とともに“妖怪”が生き続けることには何か意味を感じます。

図らずも訪れる幸運のことを「勿怪(もっけ)の幸い」(語源は“物の怪の幸い”)と言うように、私たちは日常生活にまつわる期待や不安を、目に見えない何か＝妖怪の活動に託して暮らしている向きもあります。私自身、あまり信仰心はありませんし、妖怪の存在にも疑問符が付きますが、**「目に見えるものが全てではない」という大切なことを教えてくれるのが、妖怪**なのかも知れません。

山梨県立甲府南高等学校
進　路　指　導　部

URL　http://www.kofuminami-h.ed.jp
E-mail　shinro@kofuminami-h.ed.jp